
もう一人

萌百合雛乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一人

【Nコード】

N3136H

【作者名】

萌百合雛乃

【あらすじ】

自分を見失った夏樹が悪夢でのもう一人の自分と決闘。その先の未来は・・・

（前書き）

えーと、少々病んでいる作品なので

まあ軽く読んでくれるくらいで結構です^^

文章とかぐだぐだですし、誤字脱字あるかもしれませんが
ご了承ください。

何してるんだ？

俺がその子に問いたてるとその子は笑って言った。

「お前と同じ事している。同時に全く別のことをしている」と。
訳がわからないまま考えていると暗くなって消えた。

俺はその子の顔を確かにみたはずなのに、思い出すことができなかった。

...

「んん・・・」

朝だ。いつの間に寝てしまったのだろう。

確か、朝の3時までには起きていた。また微妙な時間に寝てしまい、
今時計を見た限り、午前10時をこえている。

「はーあ。」

だるい体を起こす。まあ、起きたからといって何もしないのだけ
ど。

自分と同じ歳の奴等は、今は学校で気温の熱さに耐えつつも先生の
ながったらしい授業を黙々と聞いているのだろう。

俺は汗でしめったシャツを脱ぎ捨てた。

変にこっている右肩を左手を握り締めて軽く叩く。

俺が学校に行くのをやめてから半年がたった。

現在中学2年生である。今の時期は、そうだな、

みんなが待ち侘びる夏休みの一歩手前だ。

俺はこの生活に慣れたのだろうか。

いや、きつと慣れていない。ただ、クラスのみんなが自分を忘れかけていることは分かっていた。

最初は、なぜ休むのだろうという疑問が降りかかり、心配と同情の目もあつたが

今となつては不登校の一人として放置されている。

まあ、そんなことで集られても困るが。

「夏ー?! 夏樹ー!?! いい加減起きなさいよー!!」

親が叫んでいる。

俺の家は母親と父親の三人家族。

そして俺はこの家に生まれたことを軽く後悔している。

まあ自分が所謂反抗期な時期かと言われれば、間違つてはいないけど。

「起きてるつての・・・」

俺は呟きながら上半身裸で1階に降りた。

「夏起きてたの? おそかつたわねーまったくー」

笑いながら口を尖らせてぶーぶーいつている。

最初は学校へ行けとうるさかつた母親も

俺が本気で行かなくなると何も言わなくなった。

そして心なしに痩せた母親にいらつきが隠せなかった。

そんな風に無理して笑顔を作られるくらいなら

思いきり叫ばれ、ぶつけられたほうがマシだと。

「昨日はネットしてたんだよ馬鹿」

「早く寝なさいっていったのに!!」

「うるせえよ」

「それに馬鹿はいらないのよ!？」

「はいはい」

うるさい。もうこれがずっとでうるさい。

いらいらとわきあがる感情を抑え2階へ小走りする。

「あ、夏、ご飯は?!」

「いらねえ!!!」

部屋の扉を思い切りしめてクーラーをつける。

俺は多分もうこの便利すぎる機械がないと生きていけないだろう。クーラーが効き始め、俺はPCの電源を入れた。

パスワードを入力してデスクトップを見つける。

光を放つその画面をみて、ふと思った。

そういえば、今日の朝みた夢はなんだったのだろう。

あれは誰なんだ・・・?

それにあの言葉はなんだ?

「お前と同じ事している。同時に全く別のことをしている」

どという意味だよ。わけわかんねえな。

俺は軽く笑いながらすいすいとマウスを動かし始めた。

- 無題掲示板 -

俺の居場所ともいえるこの掲示板にはいろんな奴がたくさんきた。笑ってばかりの奴や、闇を持った奴まで。

ここに集う意味が何かあるのだろうか。
いや、たぶん誰もが人恋しいのだろう。

俺もそんなに明るいほうではないが、やっぱりここから抜け出すのは
難しい状態にまでなっていた。
ネット中毒というやつだろうか。

そんな事を考えていたら、ある投稿が目についた。

HN：名無しが通ります@闇主

本文：

並べられた言葉だけが本当の意味なのだろうか。
聞こえる声だけが本当に心の叫びなのだろうか。
見えるものだけが本当にある世界なのだろうか。
今こうしている自分が本当の自分なのだろうか。

俺は、少し考えた。

難しかったけど言ってる意味が分かった気がした。

今俺はきつと自分の口から本当に思っている言葉の一つさえ
吐き出せていない気がした。

吐き出せば変わるかもしれない何かを

吐き出してもしょうがないという気持ちで押し潰していた。

ただ、それじゃあ今吐き出せ、なんていわれても

無理に等しい。つまるところ何かと心の曇りが取れない。

それは簡単なことではなかった。

だからこそ、この人と同じようにそれぞれの意見を生み出し、考え、
悩み、苦しむのだろうか。

そうだ。俺は何か悩んでいる。そして今の自分に不満を持ち、
今しなければいけない何かから逃げている自分を変えたいと思って
いた。

ただ、俺はもうすでに手をつけられない状態だった。
もしかすると、気がついてないのは俺だけだったのかもしれない。

最近何やら母親がよく父親に俺の名前をだす話題をこそこそと話していた。同じに心の病気という言葉が聞こえてきたことを思い出した。

俺は心の病気なのか？だとしたらそれはどういうものなんだ？
自分でも気づかない病状とやらの不安を隠せなくなった。

いてもたってもいられなくなり、普段の冷静すぎる自分を見失う。
どうしようどうしようどうしよう・・・

耐えられなくなった俺は布団にもぐりこんだ。

クーラーが若干効きすぎて寒くなってきたこの部屋で
何よりも冷たくなったのは俺の心だった。

必死に目を瞑り、丸くなりながらまた眠りについた。

・・・

「ハハハ・・・やっと気がついたんだね」

「お前・・・誰？」

俺は目覚めると夢でおかしな事を言う奴と再会していた。

「誰だつて？ハハ、俺の顔をよく見るといいよ」

「え・・・??」

目線の先にいたのは、

「ひい・・・!!!!」

俺だった。

「どうした？自分にびびってるのか？ハハ」

「俺なのか？俺がもう一人？どうなってる、説明しろ」

「俺は俺自身、つまりお前だよ」

「説明になってないだろ。気持ち悪い、ここからだしてくれ」

「入ってきたのはお前さ。お前は今まで俺から逃げてきたんだよ」

「逃げる？俺がお前と会うのは今で2回目だZ・・・」

「そう。それはお前が逃げてきたからだ。聞きたくない自分の声から逃げてきた、そうだろ？」

「聞きたくない自分の声？」

「お前が自覚などしなかった自分の変化だ」

「変化……心の病気か……？」

「それに気づいて、お前は分からなくなった自分の本当の気持ちを探しにきたんだろ？」

「しらねえよ、そんなの・・・」

「また逃げる気か？まあ、それを決めるのもお前だ」

「でもどうやって・・・」

「それはお前が知ってるはずだよ」

「俺が？」

「俺はお前と同じことをしている。同時に別の事をしている。」

「だからなんだよ、それ」

「まだ分からないのか？ハハ。お前も俺だし俺もお前だといっている。俺とお前は同じ俺だけど、やっていることや思っていることまでは同じではない。そして俺がお前になることも、あるんだよ。ハハハハ」

「あ、ちよ、ちよとまてて!!おい!!おい!!」

おいッ！！！！！！！！！！！！！！

「……あ、れ夢か……はーあーあーあ」

時計を見る。午後3時。

寝たのは確か午前11時前。

どれだけ寝てるんだ、と自分でも突っ込みたいくらい寝た。

おかげで変な夢もみた。

気がおかしくなってしまうたのか。

ただ、あいつの言葉は何か引っかかる。どっという意味なのだろうか。
・・・考えすぎた。外にでよう。

「ちよつとでかける」

「あれ、夏どこいくの!？」

「散歩だよ散歩」

「早く帰ってきてよー??！」

俺は返事もせずに外へでた。

別にひきこもりなわけじゃないから外へでることはある。

ただ基本一人だ。別に寂しくなんかない。

むしろ人と話すのは疲れるから苦手だ。

俺はあわてて着てきたシャツを伸ばしながら歩き始めた。

住んでいるところはそこまで田舎ではないが、都会でもない。

人がちらほらいるくらいだ。

暑い日差しが降り注ぐ道路で俺は出てきた事を少し後悔した。

「あつちい・・・」

手で額の汗を拭いながら俺は人を観察していた。

少し目をこすって変化に気づいた。

こんなに暗かったらどうか。

太陽がでていて、昼だというのにこんなに暗いなんておかしい。

それに誰も俺をみていない。すれ違う人で目が合うやつが一人くらいいても

おかしくないのに・・・俺はみえてないのか??・・・なんなんだ。
おかしい。変だ。おかしいぞ。

急いで家に帰る。

勢いよく扉をあけて靴を脱ぎ捨てる。

「おい、母さん!!」

「ふんふーん ふふーん」

鼻歌でリズムを取り晩御飯を作っている。

「なあ、きいてんのかよ!」

「ゝ」

「おい!・・・もう、いい」

俺は2階の部屋で電気もつけずに考えた。

どうなってる・・・??

みえてないのか・・・いや、でもでかける前は確かに母親と話していた。

その短い間に何かあったとは考えられない。

どうということなんだ。

考えたくもない事実から目をそむけるためネットをつけた。

掲示板へ行き、書き込みをした。

HN：名無しさんが通ります@夏

本文：

暇だー

誰か相手しろー

熱すぎて頭おかしくなるわw

同意な人、拳手れ。

- - 書き込み - -

書き込みボタンを押して反映を待つと、

ERROR!!

更新するか、時間を置いてから書き込んでください。

投稿できない・・・

それから何度かしたけどできなかった。

おかしい、おかしい、おかしすぎる。

その日は晩御飯も呼ばれなかった。

俺が狂ってるのか？それとも周りが？

あいつしか・・・もうあいつしかない。

俺は布団にもぐりこみ眠りについた。

・・・

「やあ。調子はどう？ハハ」

「お前、何か知ってるだろ」

「んー、何をだろう。ハハハ」

「とぼけるな。何をした」

「そうだ。俺の今日の一日を見せてあげるよ」

「は？俺はそんなこときいてるわけじゃ・・・」

その瞬間、もう一人の俺は俺を抱きしめた。

「馬鹿！やめろッ・・・何すんだよ離せっ・・・」

「少しは黙れようるさいなあ・・・」

そういつてものすごい目で俺を睨んだ

一瞬びびったけど、すぐまた笑顔になったその顔を見て、

ほっとしたと思ったら俺の意識はぶっ飛んだ。

遠くで声が聞こえる。

「これが俺の今日の一日だよ。ハハ」

そういつて聞こえると俺の視界が明るくなった。

「いつてきまーす!!」

「あーッ夏!!御弁当ー!」

「ああ、わりいわりい」

「早くいつてらっしゃい!」

「おうっ」

そういつて走つていく俺がいた。

片手にサッカーボールを持ちながら。

そうか、サッカー部だったな、俺。

使い古しのサッカーボールをかけたブレザーの肩は白くなっていた。

学校についた俺はクラスの男子と挨拶を交わしていた。

するとたまに話をする女子が、「土ついてるよっ」と笑顔で

俺の肩をぽんぽんと叩いた。

俺はとつさに「ああ、わりい」といい、席につく。

眠気の襲う授業をだるそうに受けている俺がいる。

そして放課後、仲間達とサッカーをしている俺がいる。

帰り道、鞆を肩にかけ、ネットに入ったサッカーボールを蹴りながら歩く俺がいる。

家に帰って荷物を放置しつつ、晩御飯をつまみ食いする俺がいる。

俺の手を叩き、俺の荷物を片付ける笑顔の母さんがいる。

そして父さんと3人で食卓をかこんでいる。

そんな普通の、今思えば幸せといえる日常を送ってる俺がいた。

・・・

「これって・・・」

「俺の今日一日だよ」

「お前はずつと闇の中でいるんじゃないのか・・・??」

「そんなことはない。言つたろ？俺がお前になることもある、と。」

「そ、そんなのしんじねえ。夢でしか会えないようなお前に・・・そんなことができるか」

「どうか。ハハハ」

俺は焦りと嫉妬を抑えているので精一杯だった。

俺が、消えていく。やつと意味が分かった気がした。

こいつの言っている意味。俺。

全てが変わっている。それも”俺”の意志とは逆方向に。

いやだ。いやだ。いやだ。

俺はこんなもう一人の俺をみていたくない。

そんなに楽しそうな俺は見たくない。

だって、俺がそうしたかったのだから。

お前は俺じゃないと否定したいけど、みせられた幸せを目の前に

俺の口からでる言葉は何もなかった。

もう、何もみたくない。何も。何も。

こんなに悲しい幸せを見るくらいならもう何も見えない暗闇で。

そうすればもう、何も感じなくてすむのだから。

・・・

何してるんだ？

俺がその子に問いたてるとその子は泣きながらいった。

「お前と同じことをしたかった。なのに別の事をしていた」と。

訳がわからないまま考えていると考えていると光が差して消えた。

俺はその子の顔を見たことがあった。それは俺自身の顔だった。

...

「夏ー！！？学校遅刻するわよー！？」

「あ、おう！！今行くー！！！」

並べられた言葉だけが本当の意味なのだろうか。
聞こえる声だけが本当に心の叫びなのだろうか。
見えるものだけが本当にある世界なのだろうか。
今こうしている自分が・・・本当の自分なのだろうか。

（後書き）

結果、入れ変わってしまったわけですね。

私としては、自分の中の少し難しい部分、

自分でもよく分からない、理解できない部分に

飲み込まれたといいましようか、そんな感じを描いた
つもりです 笑

ただ、最後は苦しい自分を捨てるために

自ら自分のまだ触れてない、触れることができてない

明るい部分に飲み込まれたのではないか？

というようなテイストにしておりますw

分かりにくい話でほんとすみません^^；

また、この物語はフィクションです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3136h/>

もう一人

2010年12月4日05時27分発行